

学校教育における男女共同参画意識の醸成を目指した授業実践の展開

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2024-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 知香, 後藤, 郁子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000288

学校教育における男女共同参画意識の醸成を目指した授業実践の展開

井上知香 後藤郁子

(愛知淑徳大学 お茶の水女子大学)

Development of Classroom Practices Aimed at Fostering Awareness of Gender Equality Required in Primary School Education

Chika Inoue · Ikuko Goto

要旨

我が国では、2020年から始まったコロナ禍により顕在化した課題「性差によって負担に偏りが生じない社会づくり」への対応を加速化させる必要性が唱えられている(厚生労働省,2021)。その背景には、我が国では依然として男女共同参画をはじめとする社会実現の遅れが著しいことがある。この原因として、例えば「男の子なんだから泣かない」といった言葉が当たり前にかかれる学校現場の実情を踏まえると、小さい頃から無意識のうちに植え付けられていくアンコンシャス・バイアスの存在が挙げられる。本稿では、男女共同参画をはじめとするダイバーシティ社会実現のための若年層(主に小学生)に向けて開発された意識醸成教材の紹介と、それを用いて展開されている実証授業の検証を行いその意義について述べた。

キーワード： アンコンシャス・バイアス 公正・公平 相互理解 男女平等 授業教材

1. 問題の所在と研究の目的

我が国では、2020年から始まったコロナ禍により顕在化した課題「性差によって負担に偏りが生じない社会づくり」への対応を加速化させる必要性について厚生労働白書などで唱えられている(厚生労働省,2021)。この根拠には、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、女性の家事育児の時間が延び負担が増加している現状が挙げられている。しかしながら、こうした現状はコロナ禍で顕在化したわけではなく、以前から続く社会課題となっている。例えば、令和2年版男女共同参画白書(内閣府,2020)によると、仕事をしている夫婦の「仕事のある日」を見ると、家事時間は、夫婦になると女性は男性の2倍以上になる。最も男女差が大きい家族類型は「夫婦+子供(末子が小学生)世帯」であり、女性の家事時間は男性の3.58倍である。仕事をしている人の「仕事のない日」についても、「仕事のある日」と同様の傾向が見られ、夫婦になると女性は男性の2倍以上の家事時間となっている。育児時間においても、「夫婦+子供世帯」で仕事をしている人の「仕事のある日」を見ると、女性が男性の2.1~2.7倍程度になっている。このことから母親への家事・育児負担が大きいことが分かる。

また日本は、先進諸国の中でSTEM¹⁾領域の学問を専攻する女子学生が少ないと指摘されているうえ、2018年には東京医科大学の入試において、大学病院に勤務する医師に女性が増えると結婚・出産による退職で医師不足が起きるという理由から、本来合格とすべき女子55名が不合格になったという問題も起きている(中西,2021)。こうした状況は世界各国の男女格差に関す

る調査にも現れており、日本は依然として政治参加や経済の分野で大きな格差があるとして、156か国中120位(World Economic Forum, 2021)という調査結果であった。実際、2022年の1月現在、衆議院議員の女性比率は9.7%(内閣府男女共同参画局,2022)と、男女共同参画をはじめとするダイバーシティ社会実現への遅れは著しい。日本の社会には未だに男女に関する様々な格差・差別の意識が根強く残っており、こうした背景の中で育つ子どもたちに、無意識のうちに植え付けられていくアンコンシャス・バイアスが、大人社会におけるダイバーシティ社会実現の妨げともなる。子どもの成長段階のできるだけ早い時期から、互いの良さや多様性を認め合い、「多様な人々が自分たちの能力を十分に発揮して、より良い社会を作っていくことを貴ぶ」基本姿勢を醸成することが極めて重要であると考える。

本研究では、男女共同参画をはじめとするダイバーシティ社会実現のための若年層(主に小学生)に向けて開発された意識醸成教材「しょうたくんとあやちゃん どうしたらいいかな?」を用いて実践を行った授業における教師の捉え、子どもの捉え、学校長の捉えを明らかにする中で、教材の意義を問うことを目的とする。

(文責：井上知香、後藤郁子)

2. 教材作成に至る経緯と実施内容

本教材「しょうたくんとあやちゃん どうしたらいいかな?」²⁾は、内閣府男女共同参画局・男女共同参画推進連携会議「国・地方連携会議ネットワークを活用し

た男女共同参画推進事業」の令和2年度実施事業として、男女共同参画をはじめとするダイバーシティ社会実現のための若年層（主に小学生）に向けた意識醸成を目的に開発されたものである。

【制作物】

『しょう太くんとあやちゃん どうしたらいいかな?』

○教材作成

滝澤公子

お茶の水女子大学サイエンスエデュケーション研究所

○指導案作成

後藤郁子

お茶の水女子大学基幹研究員

お茶の水教師の第三の学び研究会

【教材内容】

・青いラジコンカーとお人形
低学年向け：男女の嗜好性、向き不向きへの固定観念について考える。

・子ども大統領
中学年向け：女子がリーダーとなることへの違和感について考える。

・私たちの未来
高学年向け：男女の性役割を固定化させる慣習、平等、人権などについて考える。

・あやちゃんのやりたいこと
高学年向け：女性と職業選択、女性と理系選択、個人尊重、意思決定の立場に女性がつくことなどに対する慣習化された偏見について考える。

【作成経緯】

《2018年度》

・小学校低学年の男女を主人公として
〈自分の中にある男女という性別による固定観念〉〈外国人差別が自己の尊厳を傷つけていること〉への気付きを扱うコンテンツを試作。
・道徳科として小学校低学年 1 限で行える授業を作成、実施。

〈男の子は車が好き、女の子はお人形遊びが好きといった男女の嗜好性〉や、〈将来の仕事観への固定観念〉はおかしいと気付くことにフォーカスした『青いラジコンカーとお人形』を作成。

「男女に縛られず、個人がそれぞれの違いを認め合い、それぞれの夢を伸ばすことを応援していくことの大切さを学ぶ授業」

《2019年度》

・外国人差別を題材とした授業用コンテンツを作成。
・小学校中学年を対象とする『子ども大統領』を作成、実施「女性が組織の意思決定の位置に就くことに対するこだわり・抵抗感」を扱う。

《2020年度以降》

東京都文京区、北区、世田谷区、大田区を中心に、授業を実施（公立校の教師が実施する場合も含む）し、評価・検討を行っている。

◇若年層（主に小学生）を対象に、子どもが生活の中で出会うダイバーシティに関する課題をめぐる様々な状況を設定し、広く活用できるような男女共同参画意識を醸成する教材を作成。

作成した教材を用いて、お茶の水女子大学と包括協定を結ぶ北区立小学校及び筆者ら（井上、後藤）が運営している お茶の水教師の第三の学び研究会の研究フィールドである文京区、世田谷区、大田区の公立小学校において実証授業を行い、得られた知見や経験を活かして教材をブラッシュアップ。授業回数 22 回、全学年にわたり実施（計 670 名）。オンライン 6 回（2021 年現在）。

◇教材は印刷製本し、指導案や授業例などと共に、内閣府 HP などに広く公開して、道徳科の授業等の利用に供する。

3. 本稿で取り上げる授業教材の紹介

(1) 「青いラジコンカーとお人形」授業案 1.2 年用

- ・主題名 「偏見を持たない心」
- ・価値項目 公正、公平、社会正義、相互理解
- ・ねらい 自分の好き嫌いにとらわれず、偏見をもたないようにする心情を育てる。

〈あらすじ〉

あやちゃんとしょう太くんは、一番大事にしているおもちゃを持ち寄って一緒に遊ぶことにしました。ところが、あやちゃんが大きな袋から大事そうに出した「青いラジコンカー」を見たしょう太くんは、「お人形さんかぬいぐるみを持ってくると思った」「女の子なのに車が好きなっておかしい」「色も青だし、青は男の色だよ」と言いました。あやちゃんは、「女の子だって車が好きでもいいでしょ」「大きくなったら車を作る人になりたい」と、怒って帰ってしまいました。

しょう太くんは、どうしたらいいでしょう？

○男女の嗜好性、向き不向きへの固定観念があることに気づき、偏見をもたないようにする気持ちを育んでいく。

(2) 「あやちゃんのやりたいこと」授業案 5.6 年用

- ・主題名 「職業選択とジェンダー平等」
- ・価値項目 公正、公平、社会正義、個性尊重
- ・ねらい 職業選択とは、「なぜ、その仕事を選ぶのか」という自らの意志が大事な要素であることを確認する。

〈あらすじ〉

あやちゃんとしょう太くんの学校では、卒業生で薬の開発を行っている会社の部長をしている女性の「お話を聞く会」がありました。病気に効く薬がな

く苦しんでいる人たちのために、新しい薬を作り出す仕事をしたと今の会社に就職し、一生懸命研究に打ち込んだ話を聞きました。また、慎重になると「女性は決断力がない」と思われる心配や、反対にきっぱりと決断すると「男性並みの強さですね」と言われた苦労話もしてくれました。あやちゃんは、「私、車のエネルギーのことが勉強したい。便利で、でも地球がダメにならない方法を考えたい」と言いました。しょう太くんは、「女の人は、普通、あまり理科とか科学の仕事をしていないよね...」と、少し戸惑いました。

しょう太くんは、どのように考えていったらいいと思いますか？

○男女の違いと職業選択は関係があるのかや、ジェンダー平等の視点から職業選択の望ましい在り方・正しい在り方について考える。

(文責：後藤郁子)

4. 授業実践と結果

都内公立小学校の2年生と6年生の2クラスにおいて道徳科の授業として行われた。2年生のクラスにおいては「青いラジコンカーとお人形」が教材として取り上げられ、6年生のクラスにおいては「あやちゃんのやりたいこと」が教材として取り上げられた。

授業実施後、2023年12月に筆者らが担任2名(以降2年生担任をK教諭、6年生担任をH教諭とする)、学校長と共に1時間程度のグループインタビューを実施した。

主な質問項目は次のとおりである。担任に対しては以下の質問項目に沿いながらインタビューを進めた。

1) 授業で印象に残っている子どもの発言や受け止めについて。2) 子どもたちにアンコンシャス・バイアスは見られたか。3) 教師自身の授業実践をしての気づき。

学校長に対しては以下の質問項目に沿いながらインタビューを進めた。1) 全クラス実施の意味。2) ジェンダーをテーマの授業を行う意味。3) 教師自身にアンコンシャス・バイアスがあったかどうかとその捉えについて。

質問項目に沿いながら自由に発言してもらった内容をICレコーダーで録音し、後で逐語録に起こし、データとした。また授業後に子どもたちが記述したワークシートも補足的にデータとして活用し、考察を行った。

本研究の実施に当たっては、研究概要を事前に説明し、同意を得ている。

(1) 決めつけないことを意識する—2年生の子どもたちと担任の受け止め

2年生担任のK教諭からは、子どもたちから「決め

つけない」という子どもたちの言葉が印象的だったということが語られた。子どもたちの受け止めは、K教諭には「男の子だから女の子だからではなく、決めつけるということにつながって」いったと受け止められており、男女を超えた人としての在り方について学ぶ機会であったことを述べていた。以下に2年生の子どもたちのワークシートに記述された内容を紹介しながら、考察を進めていく。

“きめつけるということはじぶんのこのみをおしつけるということです。なのできめつけをやめたほうがいいと思います”

“男の子だから女の子だからってきめつけしないでそれをきめられるのは**じぶんじしん**だと思います”

“「女の子は、こういうことはしてはいけない。」とかはきめつけしないで考えることを、いいとかがえました”

また授業内では、ジェンダーという言葉を使用しなかったけれども、子どもの中には「ジェンダーにとらわれず」と書く子どもがいて、子どもが振り返りに書くほどジェンダーという言葉が入っているとは思わなかったという驚きもK教諭からは語られた。

“ジェンダーにとらわれずに好きなことができるようにきめつけないようにしたいです”

さらに、青いラジコンカーを女の子が持っていてもいいと思うし、かわいいぬいぐるみやお人形を男の子が持っていていいと思いますという内容も子どもたちにより書かれており、K教諭は、子どもたちがとても素直に受け止めてくれていることを語っていた。

K教諭が、素直に受け止めていると感じたのは、子どもたちが授業実践の中で、自分のこれまでの経験と結び付けたうえで、実感を持ちながら記述されていることも見て取ったからであると考えられる。

“ほいくえんのととき友達と学校のランドセルのいろを話しているとき「男子は黒じゃないの」ときめつけていたときがありました。だからきめつけてはいけないことがわかりました”

“今まで弟に女の子っぽいねって小さい時に言いました。だから、こんどからは、そういうことを言わないでします”

“男の子だから...女の子だから...私は、走るのが好き、頭を使うゲームも好き、でもどくしょも好き。友だちからは私は、男の子みたいな女の子と言われてい

ました。でも今の「青いラジコンカーとお人形」をよんだらそんなこと気にしなくなりました”

子どもたちは、「青いラジコンカーとお人形」に書かれたストーリーの中で描かれるあやさんの声に耳を傾け、自分の過去の体験を想起している。そのうえで、どうしたいのか、これからの自分の行為について述べる内容が見られる。また、「男の子みたいな女の子」と言われていた子どもは、「そんなこと気にしなくなりました」と述べており、友達からの発言によって自分の在り方について揺らぎを覚えていたことが想像される。しかしながらあやさんの声に触れることで、自分は自分の好きなものを好きと言っていいし、今の自分でいいのだと確かめている様子が伺える。

同じように6年生においても、自分の体験を想起しながら授業実践を捉えている子どもの姿が担任H教諭によって語られていた。

(2) 子どもたちにアンコンシャス・バイアスは見られたか—6年生の子どもたちと担任の受け止め

6年生担任のH教諭が印象的だったのは、まず「あやさんのやりたいこと」のストーリーを聞いた子どもたちから、怒りをもった発言が聞かれたことだという。性別で人の職業をきめつけるなんてありえないというような発言から授業が展開していったことで、H教諭は、子どもたちは「性別でそういうふうな職業の選択が決めつけられるのは違うっていうのはよく知識としてわかっている」のだと感じたという。

さらに、「今までの生活で、男だから、女だからと考えたことがありますか？男女関係ないと強く思ったことはありますか？」というワークシートの問いかけに対して、あると答えた子どもたちの発言を受けて、「日常のところからにじみ出てきているのかな」と語りながら、実際に子どもたちが感じていることを知ることができたと述べている。

“女だから、といわれたときはすごくムカつきます。女だから家事など手伝いなさい。部屋片づけなさい...その分、男は家事もしないで、部屋を片付けもしない。自分だけよく言われるのに、男に対しては、男だからしょうがない。という考えは、男女関係ないとつつつつよく思います”

“...実行委員を決めるときに、女子には票をいれないといっている友達(男子)がいたけれどぼくは、いいスピーチをしている人(女子)に票をいれました”

これらの発言をした子どもたちは、自分を取り巻く性差による差別につながる内容に対して疑問を呈するような自分の意見を述べている。H教諭もまたこの後

者の発言に対しては、「男子だから、女子だからとか本当は多分きっとそうじゃない、この年齢だから恥ずかしいとかなんか色々あるかもしれないですけど、ちっちゃいことがジェンダーの問題に関わっているんだっていうのにちょっと気づき始めているのかな」と語っており、同時に授業の時間が「すごくいい機会」であると述べている。

また実際に自分の持つアンコンシャス・バイアスに気付くような回答をしている子どももいた。

“飛行機に乗ったときに、男性のキャビンアテンダントさんがいました。最初に見たときに...少し戸惑ってました”

同時にH教諭からは、男の仕事、女の仕事という固定観念がもう社会についているから無理にそこにチャレンジしなくてもいいのではないかと述べたという子どもの発言についても語られた。実際、「男女で職業の不向きがあると思いますか？」という問いかけには、「ある」という意見が、クラスの子どもたちからは多かったと述べ、日々生きている社会の中で様々な情報をキャッチしてよく考えていると語られた。

“漁業や建築など、力仕事などは多少力がある男性が多いと思います”

“女性用のアパレルショップに男性しかいないと不安になる。アパレル関係は同じ性別の方が客としては安心”

授業実践を通して、H教諭は、個々の児童理解を深められたと述べていた。性差を題材として語ることで、「子どもたちが色々なところから考えを持ってきた」ことを感じ、それにより「いろいろ見れて面白い」と思ったという。また子どもたちがあやさんに対して持った思いに触れる中で、それぞれの子どもに対する児童理解が深まったという。「新しい視点」で子どもたちを見ることができるようになったという。

また子どもたちの変化としては、6年生になると子どもたちが「男子は、女子は」とグループで括ってしまうことが多かったため、年度当初から、「そうではなくて〇〇君でしょう」といったように名前と呼ぶように指導してきたという。この授業を通して、男子はこうで女子はこうという括った言い方が、子どもたちの中で少しなくなってきたように感じるのとのことであった。

(3) 学校長の本教材に対する受け止め

学校長は、本実践をある特定のクラスのみで実施するのではなく、学校全体全クラスで実施する事に意味

を見出し「小学校段階でこういうことを考える機会があるのはとても大事なこと」として位置付けていた。

さらに、大人自身が全員アンコンシャス・バイアスをもっているという自覚を持ち、自分自身の価値観も磨き続けなくてはいけないという立場にたちながら、本教材を通して、子どもの学習機会のみならず、「大人の側もちゃんと考える機会」を設けたいと述べていた。

また、固定観念が社会についているのだからしょうがないといった発言をした6年生の子どもの言葉を受けながら、その社会を作っているのは私たち大人であるという厳しい目も有する。さらに「社会が変わっていないから子どもが半分あきらめたみたいで社会を見ている」と受け止められていた。学校内では、

「自分たちが実現したい未来のために必要な力」を目標として掲げ、実践に結び付けている。「私たちが生きたい社会は、自分たちで作れる、そういう未来を創っていこう」という学校空間の中で、「しょうがないということもあるが、だとしてそれはおかしな社会だから、私たちがなんとか変えていかなくちやいけない」という発想ができる子どもたちに育ってもらいたいという願いを語りながら、子どもたちと大人に揺さぶりをかける本教材の意義を認めていた。

さらに、学校長は、本教材は自分とは違う価値観を持つ人と社会でどう生きていくかという大きな問題にもつながっているという捉えをしていた。教員側はよく「友達と一緒に」という書き方をしてしまうという。そこに対して「クラスの人」という表現でもいいのではないかと問いかけながら、みんなが「すごい仲良しでいつも遊んでみたい、そんな関係性は求めなくて良くて、一人がいいんだったら一人で全然いいんだけど、でもその相手の考えていることを理解する力を育てるといったことが必要」なのではないかと教員たちと話をしているという。6年生担任が子どもたちに対して、括らないで一人一人の名前を呼ぶように指導していたことも重なる。そのような視点を持ちながら、本教材を「先生たちが自分の中で咀嚼して、自分のフィルターを通して子どもたちに伝える、担任の言葉で伝えて行ってほしい」ことが願いとして語られていた。

5. 授業実践の意義

本授業実践を子どもの学びの視点からみると、本授業実践の時間は、子どもたちが教材のストーリーに自身の体験と重ね合わせながら自分事として受け止め、さらにそこで感じたことを言語化し、発言としてクラスの仲間や教師に受け止められる時間となっていた。決めるのは「じぶんじしん」だと述べた2年生の子どもの発言からも、性差の問題を超えて、自己決定を保障する契機となる時間としても機能していることが伺

える。6年生になると自分事に加えて社会の在り方とも照らし合わせながら考えるようになる。自分としてはこう思うが、社会はそうでないから...という狭間に挟まれる子どもの存在も確認できた。ではどうしたらいいのかという答えは個々人に委ねられる。すぐには決められる問題ではないだろう。また一つの答えがあるわけでもなく、置かれた状況によっても変わってくるであろう。本教材はそのような意味で、これから社会に出て出会うであろう問題を子どもたちに投げかけ、思考と対話を開始するきっかけを与えていると受け止めることができる。

教師は子どもたちの発言に対して、大人の一方的な見方から否定するでもなく、異なる意見や考えをしっかりと受け止める授業空間を生み出している。その声から新たな児童理解も生じていると述べていた。子どもの声を受け止め、そこから現状を把握し、大人が変化することの重要性を学校長も述べており、こうした在り方は学校全体で共有されているものであることも見えてきた。

大人が変わることなく、子どもに正しいとされる知識を与えて変化させようといった教育の在り方とは異なり、子どもも大人も変化し、社会を変化させていこうとする流れの中に、本教材が位置づき、その意義を生み出している。静かな水面に波紋を生み出す、新たな動きを生み出す一石としての役割をもつ本教材の在り様が見えてきた。

(文責：井上知香)

註

- 1)理工系分野。Science, Technology, Engineering, and Mathematics の略。
- 2)本教材「しょうたくんとあやちゃん どうしたらいいかな？」は内閣府男女共同参画局のHPからダウンロードが可能となっている。
<https://www.gender.go.jp/public/event/2020/teachingmaterials.html>
- 3)「じぶんじしん」の四角の囲みは子ども自身によるものである。子ども自身により強調されたものである。
- 4)「つつつよく」という表記は誤植ではなく、子どもが記述したものをそのままを記載している。「つよく」を強調した表現であると読み取ることができる。

引用文献

- 厚生労働省（2021）令和3年版厚生労働白書。
<https://www.mhlw.go.jp/content/001011736.pdf>（2024年1月3日最終閲覧）
- 内閣府（2020）令和2年版男女共同参画白書。
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/ze

ntai/pdf/r02_tokusyu.pdf (2024年1月3日最終閲覧)

内閣府男女共同参画局 (2022) 男女共同参画の最近の動き.

<https://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/ikenkoukan/82/pdf/1.pdf> (2024年1月3日最終閲覧)

中西裕子 (2021) 学校教育における男女共同参画の現状と課題 教育選択のジェンダー公正を目指して.

NWEC 実践研究, 11. 6-31.

World Economic Forum (2021) The Global Gender Gap Report 2021.

https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf (2024年1月3日最終閲覧).

謝辞

本研究にご協力くださいました先生方に心より感謝申し上げます。